

纏向遺跡第 209 次調査（箸墓古墳周辺第 21 次調査）

現地説明会資料

2026 年 2 月 21 日（土）

桜井市教育委員会

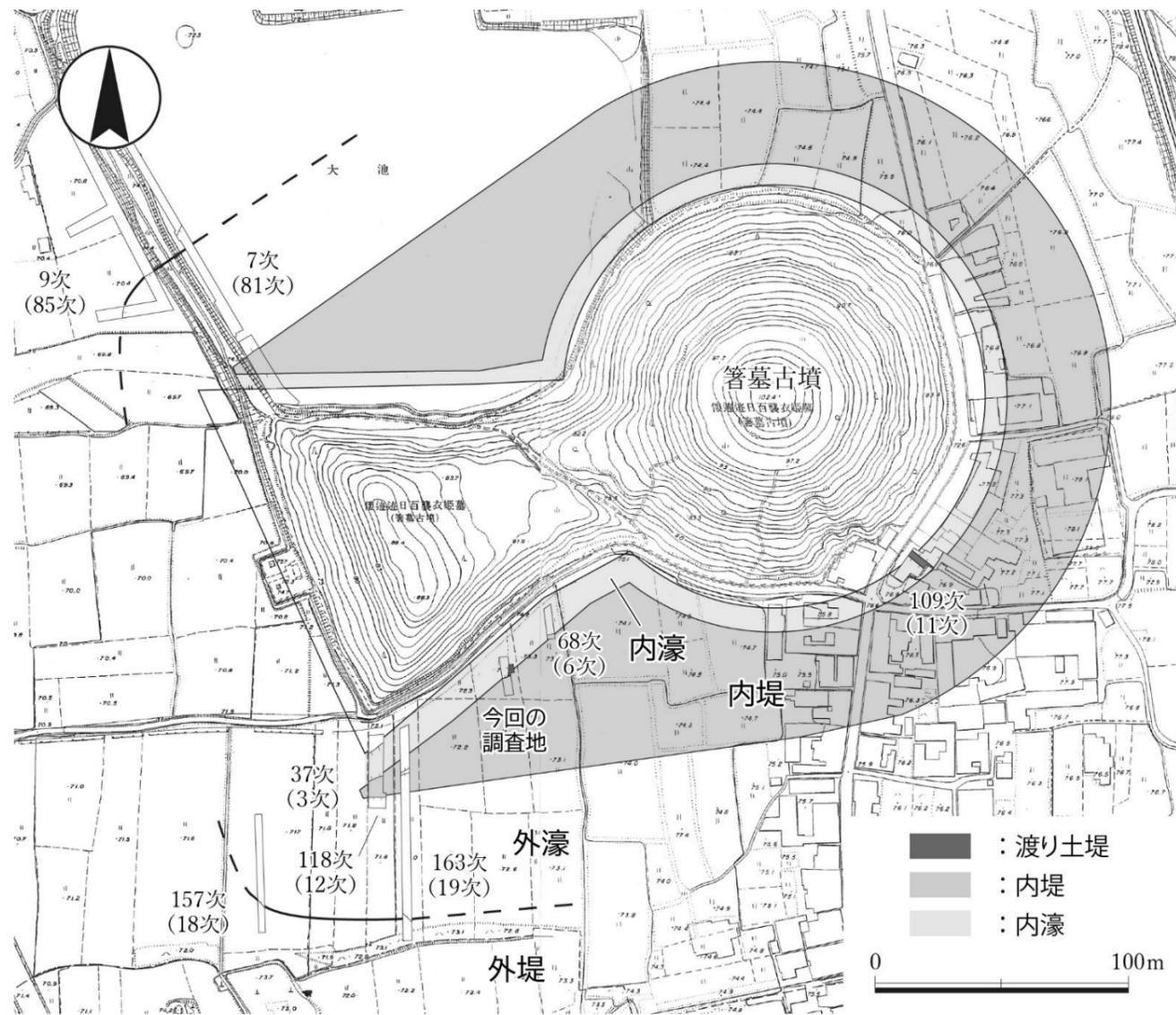


図 5 調査地位置図 (S=1/2,500)

3. まとめ

今回の調査では、調査地一帯が旧纏向川の氾濫による影響を受けており、遺構の残りは悪いものの、内濠や渡り土堤と考えられる遺構を確認しました。第 11 次調査の成果と合わせて、箸墓古墳の渡り土堤には葺石があるものとないものの 2 種類があることが確認されました。

渡り土堤は奈良県下では 10 基以上の古墳で確認されています。例えば、西殿塚古墳（天理市）、渋谷向山古墳（天理市）、佐紀陵山古墳（奈良市）などが挙げられます。箸墓古墳は日本で最初に築造された大型前方後円墳とされており、これ以降の大型前方後円墳の系譜や構造を考えるうえで重要な成果です。

また、後円部と前方部の両方で渡り土堤が確認されたことは、墳丘周辺全体に複数の渡り土堤があるという想定を補強するものであり、渡り土堤によって内濠内の水を調整していたと考えられます。

今回とこれまでの調査から、墳丘周辺の構造が明らかになってきました。一方で、箸墓古墳築造後には繰り返し洪水が押し寄せ、墳丘周辺施設はかなり削り取られていることもわかってきました。

纏向遺跡第 209 次調査（箸墓古墳周辺第 21 次調査）現地説明会資料 2026 年 2 月 21 日（土）
桜井市教育委員会事務局文化財課 〒633-0074 奈良県桜井市大字芝 58-2 桜井市立埋蔵文化財センター内
TEL：0744-42-6005 FAX：0744-42-1366

1. はじめに

箸墓古墳は、纏向川の北、纏向遺跡の南端に位置する全長約 280m の前方後円墳です。3 世紀中頃から後半の築造と考えられ、大型前方後円墳のなかでも最も古く位置付けられています。現在は宮内庁により倭迹迹日百襲姫命大市墓として陵墓に治定されており、墳丘内への立ち入りが禁止されています。

墳丘上においては宮内庁書陵部による現状調査などが実施されているほか、桜井市教育委員会や奈良県立橿原考古学研究所によってこれまでに 20 件の発掘調査が行われており、これらの発掘調査成果から箸墓古墳墳丘の周辺には内濠が存在し、その外側には内堤が築かれ、さらにその外側には大規模な落ち込みが広がっていたことがわかっています。

今回の調査は、前方部南側で計画された駐車場造成に先立つ発掘調査で、内濠など墳丘周辺施設の検出が期待されました。調査は令和 8 年 1 月 20 日から開始し、面積約 58 m² で実施しています。



図 1 調査地周辺図

2. 調査の成果

調査区一帯は、4 世紀前半と 6 世紀前半の少なくとも 2 度の纏向川の氾濫の影響を受けていましたが、内濠と渡り土堤と考えられる遺構を確認しました。

渡り土堤 調査区の東端で、南北方向に内濠を横断する盛土遺構を確認しました。調査区の関係上、前方部との接続部や全幅は確認できませんでしたが、この盛土は渡り土堤と考えられます。葺石は施されておらず、内濠を掘削した後に盛土によって築造されていました。第 11 次調査（平成 10 年度）では、葺石が施された渡り土堤が確認されており、今回の渡り土堤は葺石はみられないものの箸墓古墳では 2 例目の確認となりました。今回の渡り土堤の規模については、高さは内濠底より 1.1m 以上、上面幅 2m 以上、基底幅 3 m 以上、検出長約 6.4m です。第 11 次調査で確認された渡り土堤は、堤の高さが内濠底より約 1.3m、基底幅約 4.8m、堤上面の通路幅は約 2 m です。渡り土堤とは墳丘と外部とをつなぐ高まりのことで、通路としての役割や、高低差の大きい内濠にまんべんなく水を湛える堰としての役割などが想定されています。箸墓古墳の後円部北東側と前方部北側の内濠底の標高差は約 6 m あり、緩やかな傾斜地形に位置している古墳の内濠全体に水を巡らせるために、複数の渡り土堤によって内濠を区切り水面を階段状に調整していたと想定されます。

内濠 調査区の関係上、内濠全体を確認することはできませんでしたが、幅約 8 m 以上であることが確認できました。内濠の底面まで洪水砂が溜まっており、箸墓古墳築造当時の堆積層は渡り土堤の西斜

面に一部残っていたものの、全体で確認することができませんでした。周辺の調査成果から幅 10m 余りの内濠が墳丘に沿って巡っていたことがわかっていますが、今回の成果からも、同様の規模であると言えます。

内堤 内堤は箸墓古墳築造以前の旧河川堆積層を削り残し、その上に盛土を積み上げて構築されていることを周辺の調査で確認しています。幅約 15m 以上の高まりとして、内濠の外側に巡っていたと考えられています。今回の調査では、調査区南半は 6 世紀前半の旧纏向川の氾濫により大きく削り取られていたため、内堤下部の地山部分のみを検出しています。

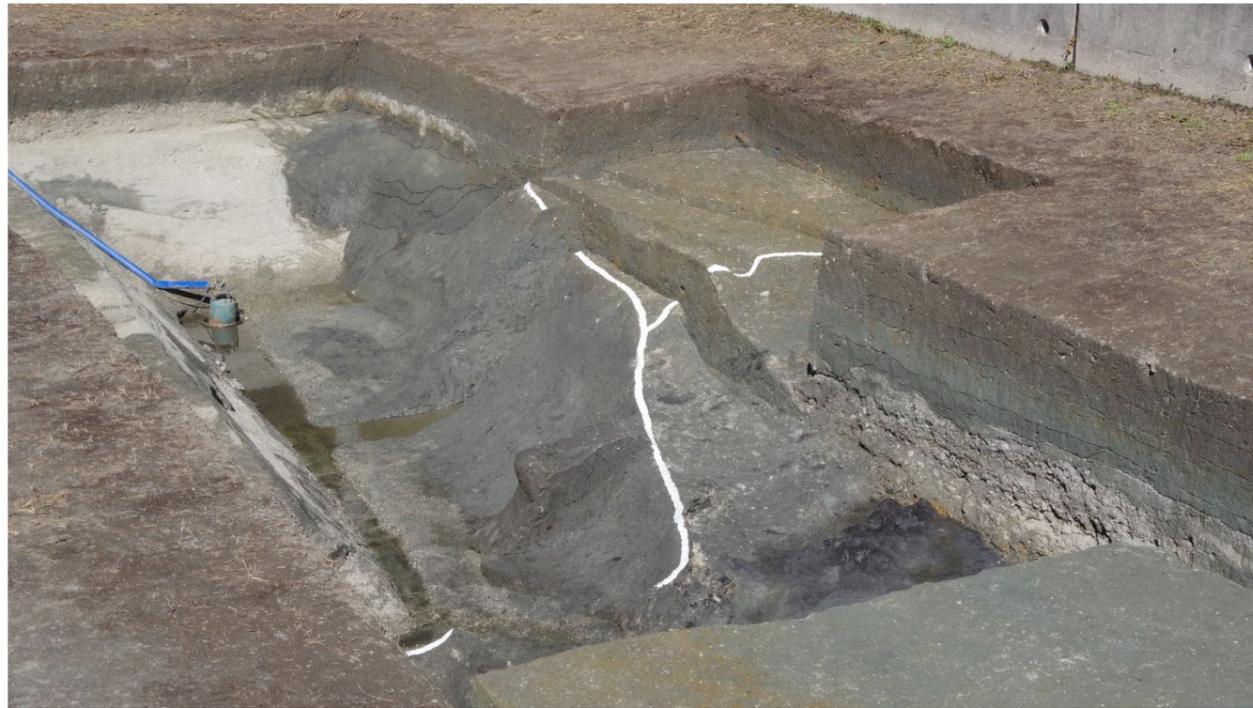


図2 渡り土堤（南西から） 南側は洪水によって削り取られている（写真右側）



図3 内濠の中にたまった 4 世紀前半の洪水砂除去状況（北西から）

出土遺物 遺物は主に内濠内外の洪水砂層から土器片が多数出土しています。4 世紀前半の洪水砂からは布留 1 式期の古式土師器片（高坏・甕など）が、6 世紀前半の洪水砂からは MT-15 型式期の須恵器片（坏蓋）や古式土師器片が多数出土しています。これらの土器片の多くは洪水によって角が削られ丸みを帯びており、当時の洪水による浸食の激しさを物語っています。また、渡り土堤の西斜面に一部残っていた内濠本来の堆積層からは古式土師器片が出土しています。

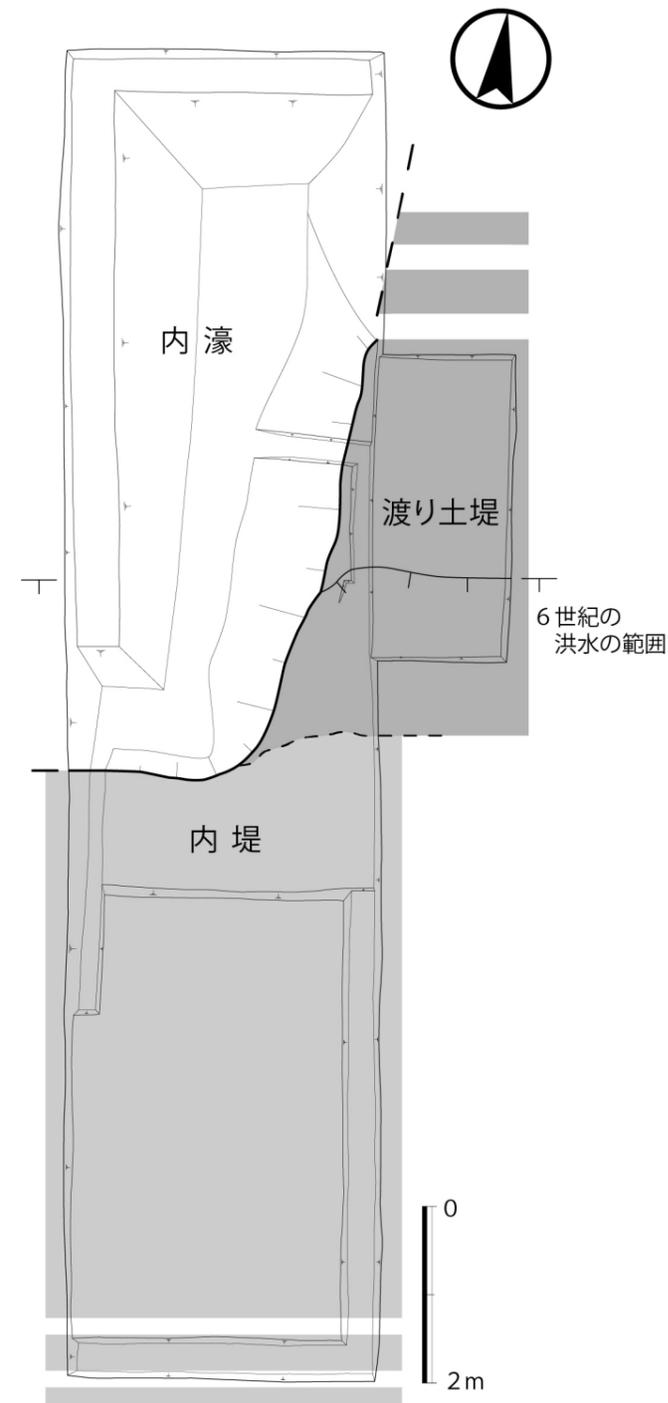


図4 調査区模式図（S=1/80）（左図）とトレンチ全景（上が北）（右図）